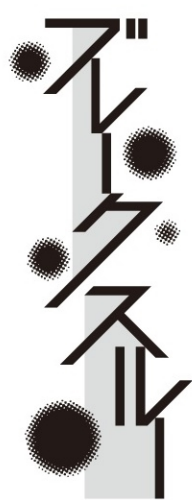


敗者に共感 語り の神話



「古事記を研究していると考古学、文化人類学、民族学、遺伝子研究にも興味が出てくる。国文学だけでなくちっとも面白くない」と語る三浦佑之さん



古事記研究の三浦佑之さん

古来、人びとほどのように自らのルーツを次の世代に伝えてきたのだらう。古者が語るという大胆なスタイルの「口語訳 古事記」で人気を博した千葉大名大学教授三浦佑之さんの関心の中心は、常に「語り」にあった。「当時の文学作品は漢文で書かれているわけですが、語りの世界で考えると、もっと広がりがあったんじゃないだろうか」

音の論理

成城大2年生の時、国文学者の中西進さんの講義で古事記と出会った。中国文学にも精通し、文学とは何かという根源的な問題意識のある

中西さんの話は「とにかく面白かった」。何より古事記の比喩表現に、心引かれた。「僕らが使う日本語と全然違ふ。きれいに整った万葉集と違って、素朴で生な感じがした」。中西さんに師事し、国文学の道へ。民俗学者柳田国男の「遠野物語」などの伝承文学も参照しつつ、語りの声に耳を澄ませてきた。「物語が声で語られるとき、どんなふうにも組み立てられるのか。純粋に漢文で書かれた日本書紀と違い、古事記は同じ言葉を繰り返したりしてこく畳みかけたり、音の論理を持っている」

口語訳

「語り論」研究の集大成が、2002年刊行の「口語訳 古事記」だ。語り部の古老を登場させ「知っておるのは、天と地が出来てからのことじゃ」「そうよ」と、原文にならぬ要素も加え、いろいろ端で語って聞かせるように、神話の世界から、ヤ

日本列島は多様に存在する



かつて近くの大学に勤務し、毎日のように古書店を巡った東京神保町を歩く三浦佑之さん
東京都千代田区

マトに滅ぼされた人々の悲哀まで再現した。「語りの大きな役割は滅びたものに向き合うこと。成功譚は語りには向いてないんじゃないか」

「記紀」と並列されることが多いが、日本書紀とは対照的だ。「日本書紀は国家の論理が非常に強く、天皇の側がいかに対敵者をやっつけるかという物語で、視点も国家の側。古事記はそうではなく視点も負けた側にあり、敗者に共感して語っていると僕には読める」

出雲分析

日本書紀ではほぼ触れられないのに古事記神話の4割を占める出雲神



三浦佑之さん(左)と中西進さん(右)。学会出席の折に立ち寄った宮城県涌谷町で=1970年代

話は象徴的だ。6000超の新著「出雲神話論」で詳細に分析し、古代日本のイメージ刷新に挑んだ。出雲神話の主役はオホナムチ(オホクニヌシ)。スサノヲの娘をめぐり、出雲に壮大な宮殿を建てるが、アマテラスが派遣したタケミカヅチに追い詰められて降伏する。「国譲り」と呼ばれる出来事を、三浦さんは「制圧」と読み替え、日本海沿岸の中心地だった出雲がヤマトに吸収

された歴史を表現したとみる。古代出雲は高志(北陸を中心とした日本海側)と交流を持ち、朝鮮半島の行き来も活発だった。2000年に出版された大社の境内で巨大な柱が出土するなど、古代出雲の発展を示す考古学研究成果も相次いだ。かつて歴史学者網野善彦さんが提唱した「環日本海文化」に重なる世界像が、出雲に見いだされる。「中央と周縁の関係を固定的に捉えていると、身動きが取れなくなってしまう。古事記には、日本列島を全然違う形で捉え返し、世界が多様に見えてくる面白さがある」

人は始原の物語を求める。国がどうやって始まり、続いてきたかを語る。だがその物語は「唯一の日本」を求める思想と隣り合わせでもある。「それは違う。日本列島は多様に存在する」。全てを中央と国家に収斂させようとする動きと多様性への志向。古事記を巡る両者のせめぎ合いは、今も続いている。 〓おわり

序文に疑念 「偽造」と独自説

「ずっと古事記研究の王道の中で考えてきた」。長女で作家の三浦しをんさんから家族から、古事記オタクの「ゴジオタ」と呼ばれる三浦佑之さん。転機は2002年刊行の口語訳だ。逐語的に読み解くうち「序文をそのまま捉えていいのだろうか」と疑念が膨らみ、序は「偽造された」とする独自の説を唱えるに至った。

天武天皇の時代に企画され、太安万侶の編さんで712年に成立した、と序文には記されている。天武天皇は同時期に、律令国家の正史として「日本書紀」も企画した。だが「古事記」はむしろ、律令国家の枠の外にある、反権威的な神話群をばらんでいる。正史を残そうとする天皇の意図と矛盾するのではないのか。こうした分析から、古事記を権威付けするために、9世紀初頭に「序」が書かれたと見なした。

一方で、その「怪しさ」に引かれてもきた。「古事記はいかがわしいんだと言ってきた。どうも読み切れない癖のある感じが魅力的で、50年研究を続けても飽きない」